

西郷隆盛夢物譚上

西郷隆盛夢中の萬造主幸逢心根と上聞せし事

夢の世に夢あり身身のつづきを悔する時こそ夢の覚めけり
 云るためと今這小西郷隆盛より此程の戦事止時無く
 身の川尻の本陣を張り一萬有餘の兵士とて己が四肢
 と動使が如くを屢王師を抗するも撓む色も少し
 なく共身の強て戦地は臨まぬと至も計策を帷幄の
 中より廻らし勝事と千里の外を決する張良氣位はよく
 戦車の暇ふい桐野其他の將校と終日棋盤を打圍り或は
 遊獵を娛り居る其膽畧の廣大うて味方の諸將をも計り
 知るべきにあふはといふ頃二月の末つ方深谷の水解初めて時得顔
 たる梅香や山路も野辺もあえて草木の緑り濃りに萌え思ひを忍びつ
 或は夜隆盛只獨り燈火の下に坐と占て和漢の兵書と繕て良獨吟よ
 及び春の夜なれば更安ん寝眠曉月を催と彼の唐人の云ひし如く
 隆盛机を隠し思ふは黒甜郷は八一時身はうつろ暗薫の香りのわ
 に四方は馨き折しもあは左も尊ける一個の童子現來り正しくと



正士とせし宣ふ貴童は何もより参らまじやと伺ひたれ童子は
 猶も辞を正し辱し世界万天の命使し未りより早や行なむと
 開け立て先よ立つ知へる隆盛不思議の晴やと至り
 童子が言葉に隨ひて跡辺の方よ
 附添て浮べる雲々風船に乗
 行心地のあつしけ遙る向ふと
 仰きみるに正しく
 大内裏とも思ふと
 南北三十六町
 東西廿
 町より
 て四方
 に二十二門
 あり隆盛引つ
 終小其河を至りてるれば
 南の美福門紫雲清涼
 温明殿日花月花の両門
 陳の坐軒廊左右の掖
 南殿の階下ふ右道の橋
 左道の橋若や中央の
 鳥の旗と立左の日の旗青龍朱雀
 の旗右の月の旗玄武白虎の旗



此の世に隆盛開敷坐を改め是の不審敷其一言照敷此身も對されて
 正士とせし宣ふ貴童は何もより参らまじやと伺ひたれ童子は
 猶も辞を正し辱し世界万天の命使し未りより早や行なむと
 開け立て先よ立つ知へる隆盛不思議の晴やと至り
 童子が言葉に隨ひて跡辺の方よ
 附添て浮べる雲々風船に乗
 行心地のあつしけ遙る向ふと
 仰きみるに正しく
 大内裏とも思ふと
 南北三十六町
 東西廿
 町より
 て四方
 に二十二門
 あり隆盛引つ
 終小其河を至りてるれば
 南の美福門紫雲清涼
 温明殿日花月花の両門
 陳の坐軒廊左右の掖
 南殿の階下ふ右道の橋
 左道の橋若や中央の
 鳥の旗と立左の日の旗青龍朱雀
 の旗右の月の旗玄武白虎の旗

一月以來日本國の皇殿に出現し汝の心意を聞し
 多の人命を損じ腥煙既天庭を穢すに至らんともあらむ
 神靈權か日本國の皇殿に出現し汝の心意を聞し
 直明哉の神断を行はんとせむと最有かた神宣は隆盛の
 ちと計を平伏し何處何處の神靈に在り奉る
 あつねらも神言の程に隆盛身もこりての書ひ
 此上あつねら勿体なるや世界万天の主宰とて
 假令無寛の事もせよ以下次の繪は出づ 笑門舎記

西郷隆盛夢物譚中

汚名を受し某も忌むるを浅く
 御神言隆盛身にとり生前の面目是れを
 謹言言上る世の猶神宣行りて曰く故明治の初め



明治年 本所外町廿二番地
 九月三日 編輯者 田中
 御届 出版者 田中

揚洲齋店
 明治年 本所外町廿二番地
 九月三日 編輯者 田中
 御届 出版者 田中



町あり四方に二十二門あり隆盛引りてあり其河を王りとるに南に美福門紫雲清涼温明殿日花月花の西門陳の坐軒廊左右の掖南殿の階下ふい右近の橋左近の桜若やふ中央の橋馬の旗を立左の日の旗青龍朱雀の旗右の日の旗玄武白虎の旗



上り汚名を受一某も忘れぬ御神言隆盛身にとり生前の面目はあはれと謹言言上る世に猶神宣りて曰く汝明治の初め日本帝王を補翼て國事に於骨一報國の義名を奉げ勲功第一等たる身とて今日暴徒の巨魁となり國亂を起し許多の人命を殞せし汝の挙動は如何なる心根あるぞや時侯は因て天災免るべし汝は是を主宰の不徳よふなりと晝夜の憂慮止時は先づ日より汝が心意を聞しあり覺ゆれど世界万種の主宰あて魯土戦争の事だも捨ちて汝の身を幸ひ今斯く文武の配りし折る故思ふべきを神の身に幸ひ今斯く文武の百官左右の大臣参内しわね時を今汝が蜂起せし事乃原由と包まひ語れと宣ひに隆盛と頭を下げ是は有が御義を奉げし頃より某が意心を包まひ皇帝陛下は奏聞あらんと上京の半途はてし官士小遣さし思ふに戦塵を蒙り遂に神慮を損し奉る罪のゆるさされ



多くの人命を損し腥煙既天庭と穢し至らんとす一月以来日本國は汝賊魁となり干戈を邦内にし神靈權日本國の皇殿に出現し汝の心意を聞し神宣隆盛の直明裁の神断を行かんとするありと最有かた神宣隆盛のあはれねども神言の程隆盛をいりての喜ひ此上あはれは分るや世界万種の主宰として假令無寛の事もせし以下次の繪は出ス美門會祀

明治年 本町外町三丁目 西郷隆盛御遺跡 御届 出札 多智五郎 價四角



吾國王の錦旗は抗し人命を喜まざる戦争と好めざる緒のゆゆしき事あるに其原由の起まるも吾皇帝の左右より機密の能事しに人の意と知らずに只某とて無名な暴徒の巨魁となり成功後の九州に兩政府をわね南北朝の昔を再びひるるに至るは跡方にも根無言を以て某と無寛の非道に浴し入上と迷はれ虚言の謀計を悪むおろくに待れとも今神顔を拜し奉るを幸ひ事をくくも誓いの間御耳と撥し奉土に著しく侍れとも左様右様の貴臣に二三の奸臣ありておのれ私欲を専横し陽に公明を唱へ陰に苞苴を以て凡愚なる人をして官途に代價の不適當なる代價を賦し正全収取するに因て各在の農民進進と動かし強訴止時多し商家不苛租を加へ下民の自由を聖一万人塗炭の苦難を顧みないに奢淫欲を横し一官の事務へ一々民心を恃り万民の朝廷をうらむるあり且外へ朝鮮國と申居るを結ひ苟且の倫案を已りて皇國万世の國辱を顧みないに奢淫欲を横し一官を承けくも吾日本國二種を傳へる皇朝の民用を廢し士族の永世を承けくも吾日本國二種を傳へる皇朝の民用を廢し